
セーブをお望みですか？

夏一陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セーブをお望みですか？

【Nコード】

N6528Y

【作者名】

夏一陽

【あらすじ】

魔法学校卒業したての少女マジセブはセーブ士アルゼナに憧れて、超難解な魔法であるセーブ術を武器に、稼げるギルドメンバーを目指す。ちよつとSな主人公マジセブと、熱血漢？のセロイナやDMのジジイと一緒に楽しく冒険しよう。

初仲間

風のように大地を走り巡り、闇のなかの一つの光明となる伝説のセーブ士アルゼナ。

歴史に名を残そうと勇者を目指した者たちは、伝説の武具や秘宝より、まず彼女を探し求めたという。

彼女が唱えるセーブ術は神速のごとく、そして場所を選ばない。海の上を走る船の上だろうが、空を滑空するドラゴンの背中だろうが、彼女アルゼナは勇者とその仲間たちを記録し続け、安全な旅を確約したのだった。そんなアルゼナ様に、私は子供のころから憧れていた。

学校の課目にはないセーブ術習得への道を歩み、白魔術だろうが黒魔術だろうが、なんだろうがかんだろうが、そんなものは投げ捨てて、学校生活の全てをセーブ術に捧げた。剣術のなんとかスラッシュだろうが、なんとかコンボだろうが、その間もずっと、教習生のセーブだけをしていた。

やがて学校では『セーブだけスゴイ』と指差されるようになり、あだ名を『マジセブ』とつけられた。マジすごいセーブの略らしいが、内心馬鹿にされていることは私も知っていた。

私が唱えるセーブ術はロバの歩みより遅く、仲間を危険に晒すことさえあったからだ。

でも私は、いつかこのセーブ術が世界を救うと信じている。

ガコッ！ という音で目がさめると、頭からじわじわと鈍い痛みが伝わってきた。

「いったーい……」

頭を触ると、やっぱりコブができています。絶妙なバランスで荷馬車の壁にもたれて寝ていたのだが、バランスが崩れて底板へ盛大にぶつけたみたいだ。

陽が登り始めて、出発の朝とは景色が随分と変わっていた。道は今までのあぜ道と違って石畳になり、延々と振動が続く。私の横では麦の入った袋が荷車の上を踊るように転がっていた。

「あれが、ユーリエスよ」

私が目覚めたことに気づいて、御者台の叔母が振り返った。荷台に立ち上がって前方を見ると、今まで見たこともない大きな壁が青空の下にそびえていた。

ユーリエスは石壁に囲まれた街で、その外観はまるでお城のように見えた。この地方では最も大きく、人の数も広さも私がいた村の何倍も大きいだ。そして何よりも魔物を征伐する役割を担う、重要な街だ。「この街が……ギルドの街……」

「そうよ。ギルドは街の中が一番大きい建物だからすぐに分かるわ。叔母さんは、商会に立ち寄っていくけど、どうする？」

「わ、私は、もちろん、ギルドに行つてきます！」

「大丈夫？ 若い女の子が一人で行くには少し物騒じゃない？」

「平気です。別に酒場に行くわけじゃないんですから」

「……。とりあえず、馬車を商会の倉庫に連れて行くから、もう少し乗ってなさい。あと、ユーリエスでは街の西の宿屋を使っているから、遅くても夕暮れまでには帰ってくるのよ」

「わかりました」

叔母はまだ私のことを心配しているようで、宿屋の場所と叔母が昼間に商売している露店の場所も事細かに教えた。

商会の倉庫に馬車を入れると、叔母はいくらかお金を渡してくれた。さすが土地をもっているだけあるな、などと感心していると、手にズシリと重量感のある金貨が3枚置かれる。

「十夜ぶんの賃金よ。ずいぶん働いてもらったからね」

しばらく私は、初めて触れる金貨を凝視した。表面にはフォーレンという名の勇者の顔が彫られている。アルゼナ様と共に、最初に魔王を倒した勇者だ。裏面には、アルゼナ様に従えたドラゴンロギネスの姿がある。この国で最も価値のある硬貨だ。

「そ、そんな……。村では寝泊りして、ここにまで連れてきていただいて……。それだけで十分です！ 賃金なんて……」

「……先立つものがないと困るでしょ？ それに、これは私の投資でもあるの」

「投資……ですか？」

「あなたは立派なギルドメンバーを目指しているんですよ。そうしたら、格安であなたに依頼を受けてもらうわ」

女盗賊のように鋭い眼光を放ち、叔母はにやりと笑った。

「本気ですね……」

「それはそうよ。私も商人をやっているからね。だから、これは投資」

「じゃあ、期待してください。良い投資だと思いますよ」

そう言って互いに笑いながら、慌しく馬車が入りする倉庫を後にする。歩きだすと曲がり角で叔母が呼び止めた。

「でも、無茶はしちゃだめよ。大事な姪なんだから」

私は笑顔で答えて、ギルドへ向かった。

ギルドは各地から集まった多種多様なスキルをもつ人々が、地域の問題を解決する目的で運営されている。もちろん、ただ情報を集めるためであったり、ギルドに依頼できるほどお金がない人が来たりして、各人それぞれ、ギルドの定義は曖昧だ。

叔母と一緒にいた村では、酒場がそういった機能を部分的に担っていたが、人も依頼も規模が大きくなると問題を解決するための専門の集団が必要になるのだろう。大きな街には必ずと言っていいほどギルドの施設があるそうだ。

街の中央にある一番大きな石造りの建物を前にして、私は一息ついた。実際に目の前にすると、ギルドは中々の迫力がある。

入口は広く開け放たれていて、多くの人々が出入りしている。その横にはギルド創設者の石像が入口を通る人々を清々しい顔で見下ろしていて、なんだかむさ苦しい、勘違い男子に見えなくもない。

中は部屋ではなく集会所のような屋根つきの広場になっていて、壁にはびっしりと掲示板が備え付けられていた。そして掲示板の前には依頼を受けるための長机が置いてあり、ギルドのメンバーは受けたい依頼が見つかる、ギルドブックを出して正式に依頼を受けることができるようだ。

まずギルドでやることはギルドブックを作ること。これがないとギルドの一員とは認められないし、なんといつても依頼を受けることができない。

私はさっそく、ギルドの隅にある総合窓口に向かった。

窓口にはヒゲともみ上げの区別がつかない、そしてかなりムキムキ系の、ジョブクラスで分けるなら戦士に該当する男性がいた。

「あのう、ギルドブックはここでもらえるんですか？」

「はい。こちらで、承っております」

意外にも丁寧な言葉づかいに、一歩おののく。

「じゃあ、ギルドブックくださいっ」

「それでは2万マルいただきまーす」

「……高っ！」

思わず、さらに一歩おののいた。現在の私の有り金は、叔母からもらった3千マルだけだ。しかしそれでも、宿屋に三泊はできるはずだ。

石像のように沈黙してしまった私に、窓口の男性は見事なセール

スマイルを見せる。

「当ユーリエスギルドのブックは、他国のギルドでも使用することができるグローバルスタンダード仕様となっております。また、紛失してしまった場合でも、再発行時に過去の達成依頼内容を復元することも可能です。ご存知かと思いますが、ユーリエスギルドブックは身分証明にも使われるほど、正式なものでして、こういった正式書類の手続き上、申し訳ございませんが、どうしても高額なお値段となっております」

欲しいっ！　いま私に必要なものはこれだ！

ギルドブックに付いてきた様々なオプションに感動して、心の中でそう叫んでみたものの、これ以上どうすることもできず一礼して窓口を去った。

2万マル……　かなり高額だけれど、叔母の家に居候してフリーな依頼、つまりギルド経由でない依頼をこなせば案外いけるのかも。

お金を集める手段を考えながらギルドを出ようとすると、後ろから懐かしい声が聞こえてきた。

「あーっ、マジブーじゃん！　キヤー！　すごい久しぶりやん！」

振り返ると、同級生のセロイナが走ってきて、私の手をとった。

「キヤー！　びっくりしたー！　セロイナがいるなんて！」

「こんなところで会うなんて、本当、すごいわぁ」

セロイナは格闘課で私の魔法課とは全く違うクラスだったけれど、セーブ術の術式をみて興味をもったらしく、それから互いの課目で習ったことを教えあったりしながら自然と仲良くなった。

行動が予測できない、まるでアメンボのようなセロイナの性格は、勇敢であるようでもあり無謀でもあって、私の慎重な性格を合わせて事に臨むと、たいてい上手くいった。それを互いに良く知っているのか、頼ったり頼られたりしながら、やがて親友といわれるぐらいい関係が深くなった。

卒業のときはもう二度と会えなくなると思つて、肩を抱き合つて泣いたけれど、こんなに早く合えるなんて、なんだかちよつと恥ずかしい。

小麦畑のような金色のショートヘアに、長い眉とぱっちりとした目で相変わらず活発そうに見える。服装も袖のない軽い上着と、膝丈までのズボンに腰元で大きめの布を結んでいて、セロイナのしなやかな体を強調している。

「マジセブ。今、じつのところ、ヒジョーに困っているんよ。城の入団試験に落ちてしまつて、このギルドに入ろうと思つてたんやけど、そんなためには『ぎるどぶつく』ちゅう物がいるらしくてなあ。それが高いのなんのって……」

「あ、それ、私も同じ境遇」

「えっ！ そうなんかあゝ。マジブーはギルド一筋やったから、もう持つてるかと思つたわあ」

セロイナは失意の表情を浮かべて、肩をおとした。

「もし私が持つてたら、どうしたの？」

「いやあ……大きい声では言えんけど、偽造しようかなあつて……」
「偽造！？ そんなの無理に決まってるじゃない！」

「しいーっ！ いや、さつき見てたら、依頼を受けるときなんか適當。あんなん、判子押してポンポンポンやで。分かんよ！」
「いやいや。それはやめときなさい。あの人たちも、偽造かどうか見ればすぐに分かるはず。というか、それができるほどギルドブツクは簡単な作りになつてない」

「そうなんかあゝ。やっぱり、だめかあ」

「どっちも目的が一緒なら、パーティを組んでフリーな依頼をやつていこうよ。報酬は半分ずつになるけど、お互い初心者だし、一人でやるよりは効率がいいかも」

「せやな。互いにまつたく違う分野やし、弱点を補えあえるしなあ」
私はここでセロイナと偶然出会った瞬間、パーティを組みたいと

思っていた。この先のことが不安でいっぱいだった私の心の大きな支えになるし、信頼できるパートナーだからだ。

学校で教えるパーティとは、各人のスキルバランスやジョブ、クラスなどを考慮して構成するものだ。しかし信頼できるパートナーが何よりも心強いと実感した。

私とセロイナはパーティを組んで、依頼を探すことにした。

初依頼

当然だけど、依頼はできるだけ楽で報酬が高くなければならない。私たちのように、まだお尻に卵の殻が付いているような初心者はおさらだ。

でも、大半の依頼主は、安くて手数が揃いさえすればいいと思っているのが現状で、2万マルを持たない初心者目当ての依頼主が、集会所で口をあけて待っているのだから、フリーの依頼を受けるときは、そのことを心得ていなければいけない。

フリーの依頼とは、ギルドを介さず個人対個人で受ける依頼のことだ。依頼内容に制限がなく、お使いのようなものから、暗殺の依頼まであるらしい。

その点、ギルドが仲介する依頼は割にあっついていてまともだ。

ギルドにとってメンバーは大切な働き手であり、優秀な働き手に育てるといった観点をもっている。それに、不利な依頼が多いギルドに人は集まりにくい。

そのためギルドは、依頼主との交渉と、メンバーの力量に見合った依頼を仲介できるかに心血を注いでいるのだ。

ギルドの依頼は、依頼主が片隅の窓口（例の戦士兼受付係）に申し込むことで正式に受理される。私の考えでは、ギルドに受理されるだろうと依頼主が思うぐらいのまともな依頼がきつとそこにあるはずだ。つまり、ギルドより先回りして依頼を横取りしようという作戦。これを横取りガッツリ作戦という……。

入口前の石像にもたれながら考えていると、セロイナが嬉々とした表情でこちらに向かって走ってきた。

「マジブー！ いい依頼があったでえ！」

「え？」

「さっきの集会所で、私らのことを見てたおじいちゃんが声を掛けて来てなあ。色々と話したら、同情してもうて、いい依頼をやるって」

「え？ え？」

セロイナが強引に腕を取って、私の体をギルドの中へ引きずって行く。

「ちよつと待つて！ 依頼内容はちゃんと聞いたの？」 「ネズミの駆逐。簡単な依頼で、うちにぴったし」

「報酬は？」

「あ、報酬のことはまだ聞いとらんかったわあ」

「はあ……」

呆れて何も言えなくなった私を、まるで口を開けて待っている鯨のような建物の中へ、引つ張り込んで行った。

依頼人は農家を営む推定年齢70代のおじいちゃん。 若干後ろに後退した虎刈りの白髪に、ほぼ髪と同じ長さの白いあご髭。焼いた七面鳥のようにテカッテカな茶色い肌。 囚人かと思えるボロボロのねずみ色の作業服。

……うん。 お金持ちには絶対に見えないね。

「いやはや、こんな楽でおいしい依頼はこのギルドでも扱つたらんわい！ おぬしら、ラッキーじゃったのう。 ふごふごー！」

あごをしゃれこうべのように鳴らしながら笑うと、狡猾な肉食動物のようにキラリと目が光ったように思えた。

「ズバリ、聞いてもいいですか？」

「ふむ。ズバリ？」

「報酬は、おいくらですか？」

「……千マル」

「それじゃあ、私たち忙しいんで、この話は無かったということでは、回れ右をして、セロイナの腰布をつかみさつさと歩く。ネズミの駆逐といった依頼は確かに初心者向けだが、完全に駆逐したことが分かりにくいため手間損だ。仮にギルドを介すれば、少なくとも千マルよりは高い。

ここはやっぱり、横取りガッツリ作戦で……。

「頼みます！　どうか、依頼を受けてくだされ！」

おじいちゃんが私の進路を防ぐように走ってくると、その場で膝をついて頭を下げた。

集会所にいるギルドの人たちが、一斉におじいちゃんと私たちに注目する。

「このままでは農場の作物も採れなくなり、うちの娘フィオナも、何にも食べれんで飢餓してしまうんじゃない。どうか、どうか、助けてくだされ……」

うわあ……最悪だ。まさか泣き落としするなんて。

どこからともなく「おい、引き受けてやれよ」とか「かわいそうに……」という声が聞こえてくる。

その無責任な野次は、ベテラン冒険者のからかいのようなもので、彼らは依頼を受けるといふ重みを良く知っている。依頼を投げ出せば信用を無くし、無理をすれば命を危険に晒す。そんな苦い経験を重ねた冒険者のなかには性根の悪い奴もいるのだろう。

私が葛藤していると、その横から何のためらいもなくセロイナが歩み出た。

「大丈夫や、おじいちゃん。うちに任せときいや」

おじいちゃんの肩に手を置き、うつすらと目に涙を浮かべながらセロイナは微笑んだ。

「ありがとぅ……ありがとぅ。……ところで、報酬は半分にしても
らえんかのぅ？」

「できないできない」

私は即答した。

ユーリエス地方には大昔の地盤沈下によって形成された大きな川
が流れている。この川のおかげで、都市周辺は肥沃な大地が広がり、
荒野でさえも膝丈の草が青々としている。

おじいちゃんの家はそんな恵まれた土地にあった。丘の中腹に街
を見下ろすように建っている少々こじんまりした白い家。所々にペ
ンキの剥げた跡や補修した箇所が生の木材が見えたりと、年季の入
りようを物語っている。色も形も全く違うけれども、ふと懐かしい
両親の家が脳裏に浮かんだ。

私の父と母は今も相変わらず、ひたすら働かされているのだろう。
土地を持っていない小作人の父と母は、陽が昇っている間は際限な
く安い賃金で働かされる。

そんな苦しい生活のなかで、私は学校に通わせてもらい、今は何
のノルマもない自由な旅をさせてもらっている。はつきり言って、
かなりの不良娘だ。でもこれは暫定であり、今のところ（仮）が付
いている。不良娘（仮）。でも必ず私は夢を叶えて、父と母を堂々
と迎えに行く。

「よし。がんばるよ！」

玄関前で教習生のときから愛用している櫓の杖を握りしめ、いざ
依頼人の家に足を踏み入れた。

ねずみといえども馬鹿にしてはいけない。あの前歯は岩も噛み砕
けるほど強靱で、鼻はじつによく効く。そのせいで執念深い厄介者
といわれ、農家では特に嫌われている。さらに病原菌を持ち込むこ
ともあり、まして咬まれてもすれば白魔術師の集中治療も必要にな

る。

おじいちゃんが私たちを部屋に案内するときも、杖を構えて、いざという時は火の玉を発射できるように慎重に移動した。逆に慎重になりすぎて、部屋に入ってインコが喚いたときは、危うく丸焼きにしてしまいそうになったけれど。

「アレが、そうじゃ……」

おじいちゃんは戦士張りのドスの効いた声で、庭を指差した。

「アレ？ アレってどういう意味や？」

セロイナは不思議そうに窓の近くに顔を寄せる。

私も庭をよく見ると、確かに作物が植えてあるの部分に、荒々しく黒い土が散らかっている。庭といってもかなりの広さがあり、あちらこちらと広範囲に点々と掘り返された跡が見受けられた。

「ひどい……」

実家の農場を思い出して、ひとり呟き同情する傍ら、セロイナは腑に落ちない様子で考え込んでいた。

「なんかおつかしいなあ……。おじいちゃん。本当に、これ、ねずみかなあ？」

「え？ ああ、もちろん。ねずみの仕業に違いないわい」

窓に鼻がくつつくほど、セロイナはもう一度庭をつぶさに見た。

「でもなあ、ねずみにしては穴が大きいし、掘り起こされた土がまだ濡れて黒いままや」

「さつき掘り起こされたってことが、そんなに変なことなの？」

「マジブー。ねずみは夜行性やん」

言われてみて、ハツとした。

セロイナの言うとおり、ねずみのほとんどが夜行性だ。ねずみは人が寝ているときに食料を盗むのだと、それで寝盗みが転じてねずみになったのだと、父がドヤ顔で言っていたのを思い出した。

そしてその後に、ジジイに対しての怒りが沸々と湧き上がる。

私は後ろを振り返り、百戦錬磨の騎士張りにドスを効かせて、ジ

ジイに杖を構えた。

「コラア！ ジジイ！ 本当のことを言えや！ 言わんと、七面鳥の丸焼きにするぞ！」

「お、お助けー！」

ジジイは本気になって、杖先を避けつつ、セロイナの後ろに隠れる。

チツ、なんて素早いジジイだ。あわよくば、一発ぐらい火の玉を発射したかったのだが。

「まあまあ、落ち着いて、落ち着きなさい。こらっ、こっち向けちゃあかん。杖をしまつて。はいはい、おじーちゃんも落ち着いて。」

……マジブー、杖は片手。両手で構えようとしちゃだめや」

攻撃態勢を解除した私になお注意を払いながら、セロイナはジジイの両肩に手をやって、優しく諭すように言う。

「おじーちゃん。私たちはなあ、おじーちゃんのことを助けてあげたいんや。だからな、敵のことを教えてーな。敵のことが分かれば、対策も打てるし、どう戦ったら有利かも分かる。こちらはこれでも色々勉強してるんよ。なあ、教えてえな」

ジジイは肩を戦慄かせながら、入れ歯をカタカタ鳴らし涙ぐむ。

……芝居の上手いジジイめ。

「わ、分かった。あ、相手は……パンサーじゃ。……おそらく、ブラックパンサー。魔物じゃ」

ジジイの答えにセロイナは顔をこわばらせた。

強く握っていたはずの櫂の杖が、カタンと間の抜けた音をたてて床に落ちた。

ブラックパンサー

死神の獵犬と通り名がつくほど、冒険者から恐れられている。

体は馬ほどの大きさで、漆黒の闇に紛れるのに適した光沢のない、真っ黒な色をしている。見た目は黒豹の強化版だが、大きく違っている点として、血のように赤い、深紅の牙をもっている。これには毒腺が仕込まれており、咬まれた動物は瞬時に麻痺してしまうのだ。ちなみにブラックパンサーの赤い牙は錬金術士にとって非常に価値の高いもので、最高級クラスの神経薬を生成する材料として高値で取引されている。

しかし黒豹と違う最大の相違点は、魔法を使うことである。

動物として攻撃面の素質を多く保有しながら、さらに下位の魔法を使えるほどの知恵があるのだ。たとえ力で勝てなくても、じわじわと魔法で体力を奪い、まるで狼のように執拗にまとわりつき、時にはそれが何昼夜に及ぶこともある。そして隙を見せたら最後、赤い牙の餌食となり冥府行きというわけだ。

ぞくつと首筋の毛が逆立った。うちのレベルじゃ勝てる相手じゃない。

一階の縁側に近い部屋で窓の外をじつと監視していると、外からセロイナが戻ってきた。

「フィオナさんは大丈夫だった？」

「ん？ ああ……元気やった」

セロイナはジジイを娘の元へ見送るため、わざわざ危険な庭を往復してきたところだ。ここ最近、ジジイと娘は安全な離れの家で暮らしているらしい。

「この依頼、私たち二人だけでは無理じゃないかなあ？」

私はセロイナの横顔を窺いながら、何気に依頼を断ることを勧めた。学校にいたころは、幾度となくセロイナの無茶無謀な作戦に巻き込まれ、明らかに失敗と思われる作戦の撤収を求めても、一度とさえ受け入れられることはなかった。

ここは慎重に事を進めなければならない。

セロイナという頑強な要塞をおとすには、十分すぎるほどの論理武装と、決して諦めない屈強の精神が必要だ。

ゴクリと生唾を飲み込む私の横で、セロイナは腰布を結びなおしながら、ぼそつとつぶやく。

「せやなあ。まさか相手が魔物なんて、思ってもみなかったわあ。

この依頼、やっぱやめとこうかなあ……」

「え!？」

「そら確かに、依頼をほっぽり出すのは嫌やけど、おじいちゃん達には別の家もあるんやし、無理に魔物を倒すこともないんやない？」

「!？ セロイナはこの依頼ノリノリだったじゃない？ どうしてそんな急に……」

セロイナの横顔をまじまじと見て、あの超好戦的なセロイナであることを再確認する。

「ブラックパンサーっちゅうのも、かなり無理な魔物やし、これで怪我でもしたら、こちらは白魔法使えんやろ？ 報酬は無くなるわ、治療費はかかるわで、なんもいいことないとちゃうかな」

正論。

あまりに真つ当なことを言うセロイナをしばらく呆然と見る。

私の知っているセロイナなら、「何いってるんや、マジブー！

ゾクゾクしてきたな！ へへへ」と、顔を紅潮させるはずだ。最後の「へへへ」は余計だけど。

「もしかして……騎士団の試験に落ちて、自制心を学んだとか？」

「何いってるんや。騎士団の試験では、うちが一番や。あいつらは、うちが女という理由だけで失格にしたんや!」

「となると……はっ！ も、もしかして、学校での模擬訓練は限界を知るために、あえて無茶をして戦っていた！？ 実戦では、徹底して慎重になるべきだと、私を諭してくれているのね！」

小さく溜息をついて、セロイナは椅子に腰掛けた。

「……お腹すいたなあ」

で、でたあー。ついにでおったわ！ その自制心のなさ、意味の分からない目的のために全身全霊を捧げる、その本性が！

「なあ、マジブー。例の鶏の油揚げを作ってくれんかなあ？ うち、もうぺこぺこや」

偶然にも部屋の隅にあるキッチンに、オリーブオイルと鶏肉がある。

さてはジジイを部屋から連れ出したのも、セロイナの一計ではなからうか。となると、この依頼を受けたのも、私を仲間にしたのも、セロイナの陰謀のようではない。

「はあ……。しょうがないな」

こうなると説得のしようはないので、私は手早く鶏の油揚げを作ることにした。ジジイには後で食材の代金を払おう。

キッチンに立つと、セロイナは体をくねらせながら、その溢れんばかりの喜びを表現しに来る。正直言つて邪魔なだけなのだが。

「マジブーの料理は、ほんとうにおいしいからな」

学校や宿屋が出す食事は、ほとんどが無味無臭の食べ物だ。今まで自分の料理以外で美味しいと思ったのは、母の料理ぐらいしかない。

さて、オリーブオイルは少ないし、あまり大量に使うのも勿体ない。ここは油揚げではなく、鶏肉を香ばしく炒めたほうがいいだろ

う。

調味料は塩と胡椒でいい。あつ、バジルとレモンもある。

下ごしらえした鶏肉は皮から焼いてパリパリにして、油は一切使わない。裏返して中まで火が通ったら、少しだけオリーブオイルをたらして鶏肉から出てきた油と塩を混ぜてソースにする。最後は焼きあがった鶏肉にソース、レモン、胡椒、バジルをかけて完成。

香ばしさの中に上品なバジルとレモンの香りが漂う。鶏肉のソテーを山のように皿に盛りテーブルの上に置くと、セロイナは二三個口に頬張った。

「う……うまいっ！ 美味すぎる！」

感極まって、肩を震わせ涙目になる始末だ。いったい、どれだけ不味いものを食べてきたやら。

「それで、ブラックパンサーはどうするの？」

ひとまず落ち着いたセロイナにもう一度聞く。

「ん？ んーと、どっちでもええよ」

「はあ……。じゃ、断りますか」

でも、依頼をなしにするなんて、正直なところ、冒険者としては恥ずかしくて悔しい限りだ。

私は長い溜息をついたあと、縁側に向かった。

「ジジイのとこに行つて、依頼を取り下げてもらうわ」

セロイナは頷かなかった。たぶん私と一緒に、悔しさと漠然とした不安が重くのし掛かっているのだろう。もしくは、ただ単に、鶏に夢中になっているかだ。まあ……おそらく後者なんだろうけど。

扉を開けるとあぜ道を遮るように、ちょこんと上品な飼猫が座っていた。油のいい匂いに誘われてやってきたんだろう。

いや……この距離にして猫というのは大きすぎる。

それに体の色はまるで漆黒の闇のように、黒猫とは異なる禍々しさがある。その違和感に気づいたとき、私の体は硬直した。そして真っ白な頭の中に、『ブラックパンサー』という文字が突然ひらめ

いた。「きゃあああああ！」

ブラックパンサーは私の悲鳴に驚いたらしく、踏んづけられたような声を発して、庭の茂みに逃げ込む。

「どうしたんや、マジブー！」

「ブブブブブブー」

「でたんか！？ 奴が！」

私が指差す茂みに向かって、走って行こうとしたセロイナを慌てて出口で引き止めると、抜けそうな腰を杖で支えながら、懸命に魔力をコントロールした。「待ってセロイナ！ とりあえず、セーブしとくっ！」

セロイナの体を包み込むように、透明な薄い膜が広がった。

セロイナを中心とした完全な球体ができあがると、ぐいつと手前にセロイナの分身を引き出す。だんだんとその水玉は小さくなり、手のひらほどの水晶玉になった。

水晶玉のなかには、完全な球体を形作った瞬間の、全てを記録したもう一人のセロイナが、氷の彫像のように静止している。そして水晶玉を屋根の高さまで浮かべて、誰にも触れさせないようにしておく。

セロイナは小さくなったもう一人の自分を見届けて、庭に飛び出した。あとはセロイナがピンチになったときを見計らって、水晶玉から復活させてあげればいい。セーブポイントさえ作ってあげれば、保存した状態にいつでも還ることができる。

ただし、意志をもつ魂が消滅してしまっただけでは遅い。この世に、人を生き返らせる魔法はないのだ。

私は疾風のごとく走り去ったセロイナを、杖をつきながら徘徊老人のように追いかけた。

ブラックパンサー

セロイナとブラックパンサーは茂みに囲まれた庭の中央で対峙していた。

障害物となる木や柵もなく、鳥の声や草のざわめく音も消えて、そのフィールドには、日常的にある何かが消えてしまったような不自然さがあった。

地面に爪を穿つように、ブラックパンサーはゆっくりとセロイナの側面に回り込む。

慎重だな、と私は思った。双方を天秤にかければ、ブラックパンサーのほうが体力も攻撃力も二倍以上だ。それなのに、正面から襲ってこないなんて。魔物とはこれほど聡い生き物なのだろうか？

手のひらほどの石を拾って、セロイナはブラックパンサーへ思いっきり投げた。

「はよ、かかってきいや」

これが見事にブラックパンサーの頭にヒットすると、手のひらほどの大きな赤い牙を二本見せつけながら咆哮した。そしてまたゆっくりと回り込む。

なお冷静さを失わないブラックパンサーに驚いた瞬間、体が二倍ほど伸びて、空をとぶ鳥の影のようにセロイナへ飛び掛る。あやうくセーブ元へ還してしまいそうなほど、ブラックパンサーの攻撃は意表をついていた。

しかし、セロイナは宙に浮いたブラックパンサーにチャクラを込めた回し蹴りを放つ。

横顔に重い一撃をもらって、ブラックパンサーは茂みを下敷きにして転がった。私は何倍もの体重差を無視して痛快に放つ蹴りの凄さに思わず感嘆した。

セロイナの格闘センスにはいつも驚かされる。とくにチャクラの使い方、というより、使いどころについては格闘課で右に出るものはいなかった。

チャクラは爆発的に運動能力を高めるけれど、魔力のように簡単に回復できない。無駄に使えば、あつという間に効果がなくなるのだ。

体勢を戻そうとするブラックパンサーは無防備で、セロイナにとつては仕掛けるチャンスだ。だが、ブラックパンサーを守るように周囲には氷の刃が浮遊して、セロイナの追い討ちを許さなかった。

「これはやばいかも……」

思わずそうつぶやいてしまうほど、セロイナにとって不利な戦いになっていた。セロイナには飛び道具がないのだ。けん制ができない分、一撃必殺の戦い方だから、長引けば勝率は低くなってしまう。ブラックパンサーはセロイナとの距離を取り始めた。消耗戦に持ち込むつもりなのだろう。杭のような硬い氷を飛ばして、間合いの外から攻撃する。このままではセロイナは赤い牙の餌食となるだろう。

もしこれが、一対一の戦いなら。

私はブラックパンサーめがけて、火の玉を放った。追尾はしないけど、当たったら結構なダメージになる大きさの火の玉だ。自慢じゃないけど、セーブ術の複雑さに比べれば容易い魔法だ。私が知ってる『唯一』の攻撃魔法。

突然の横槍にブラックパンサーは注意をそがれて、セロイナはその隙に接近する。一方の私は、櫂の杖を鍬のように何度も振って、噴火した火山のように休みなく発射する。

二対一という、数で勝つ少しばかり卑怯な戦法に、ブラックパンサーは氷の刃で火の玉を相手しながら、セロイナと戦うという戦術で対応してきた。敵ながら、あっぱれ。

集中力を欠けば火の玉か、セロイナの鉄拳をくらってしまう。苦

境に陥ったブラックパンサーは、短期決着とばかりにセロイナに突進した。

氷と炎の断片が雨のように降るなか、セロイナの判断が少しばかり鈍っていたのかもしれない。

動きに合わせるようにセロイナはチャクラを込めた回し蹴りを放ったのだが、ブラックパンサーは僅かに勢いを留めて、フェイントを入れた。

赤い牙とセロイナの大腿部がすれ違った

セーブ士にとって、最も大切なスキルは「観察眼」である。戦況をきちんと把握して、思考の隙をついた攻撃でも対応できなければいけない。たとえ槍の雨が降っていようと、目のくらむ雷が絶え間なくとも、仲間を助けるタイミングを逸してはいけない。

はた目はピンチに見えても、じつは敵を欺く演技なのかもしれない。

私は即座に、セロイナをセーブポイントに還した。赤い牙は光の粒になったセロイナを噛み砕いたが、ガチリと歯が鳴っただけだった。水しぶきのような青い光たちは、風に吹かれるように白い家へ飛んでいく。

攻撃に失敗したブラックパンサーと目が合ったとき、想定外の事実が気がついた。セロイナがいなければ、だれがブラックパンサーと戦うんだっ！

ブラックパンサーが地面を蹴って駆け寄ってきた瞬間、体が硬直した。あの黄色い瞳から確かに感じ取った殺意は、私を圧倒した。まばたきさえできず、ただひたすら、どうやったら生き残れるかを考える。火の玉を発射したところで、敵には同じ威力をもつ氷の刃がある。それに直進するだけの魔法など、簡単に避けてしまいうる。

ブラックパンサーは私の力量を知っている。接近戦に弱く、攻撃

魔法も少なく、サポート要員であることも気づいているはずだ。

こうなってしまったら、残された選択肢は……『逃げる』しかないっ！

私は全速力で白い家を目指した。

振り返ると、飛ぶような勢いでブラックパンサーが走ってくる。

その距離の縮まり方を考えると、あきらかに家へたどり着く前に捕まってしまう。しかも、ブラックパンサーの呼吸は穏やかで、冷静沈着なハンターのを失っていないかった。

顔を正面に戻して、もつと足に力を入れて必死に走った。そして敵が私の背中に爪を立てるであろう、その到達のタイミングを考える。

その予測したタイミングで振り向き、火の玉を放った。まさに思い描いていたとおりに、上体を起こしたブラックパンサーの首が炎に包まれた。構えもせず放ったせいで、私は反動で吹っ飛ぶ。そしてすぐに体勢を整えるため、立ち上がった瞬間 陽が翳った。

まるで空から降ってきたかのように、闇が広がり、そのなかに深紅の牙がはつきりと姿を現す。

ブラックパンサーは私の魔法を受けてもなお、決定的な攻撃のチャンスを見逃さなかった。格下の私が勝てるような相手ではなかったということだ。

諦めかけたとき、もう一つの影が空中で交錯した。

石が激しくぶつかり合ったような音がすると、ぱつと視界が晴れる。気づくと横にセロイナが立っていて、少し離れたところでブラックパンサーが転がっていた。

「ごめん。マジブーをエサにしようた」

セロイナは悪戯な笑みを見せて、私を立ち上がらせた。まあ幽でも使わなければ、勝てない相手なのかもしれないけれど。それでもひどい。

セロイナは握っていた石を捨てて、草の上に落ちているブラックパンサーの赤い牙を拾った。あの大きな石で空中にいるブラックパンサーの牙を叩き割ったのだろう。これは痛い。

視界の端にある黒い塊がむくりと動いて、私は慌てて身構えた。しかし、ブラックパンサーの折れた右牙からは血が滴り落ち、平衡感覚が麻痺しているせいか倒れそうになる。そして何度かセロイナを見ながら、ゆっくりと雑木林の方へ消えていった。

「また……来るかな？」

「いや。もう来ないやろ」

「どうして？」

「いったん縄張りから身を引いてしまったんやから、また来るなんて恥ずかしいやろ？」

「ふん。そうなのかなあ？」

「奴にもプライドっちゅうもんが、必ずある」

セロイナの横顔はなかなか決まっていた。……私を囚にしたこと、もう忘れてないよね。

「セロイナって、本当に無茶をするよね」

私とセロイナはジジイのいる離れに向かっていた。すでに陽は山肌を赤く照らし、虫の音も山鳥の声も来たときより随分と変わっている。

「そうかなあ？　うちの思ってる無茶と、マジブーの思ってる無茶がちやうだけやないかな」

「ブラックパンサーと戦うことは無茶じゃない？」

「ああ、それは……無茶やな」

はははっ、と軽快に笑うセロイナを見て、さっきの大闘乱と一緒に笑いがこみ上げてくる。出来立てはやほやの冒険者二人組みが、死神の獵犬といわれるブラックパンサーと戦うなんて。セーブ士ア

ルゼナの伝説でさえ、最初の敵はゴブリンと決まっている。

セロイナの性格は学生のように十分に分かっているつもりだったけど、どうやら改めないといけないみたいだ。無謀だと思っていたことも、説明のつかないセロイナの直感で、結果的にすべて大成功を収めていたのかもしれない。

ジジイの離れ小屋は白い家に比べて大分小さく、まるで牛舎のようだった。

扉を開けると、いきなり牛が不機嫌そうにモーツと鳴いた。どうやら玄関の土間で牛を飼い、奥を改築して生活できる部屋を設けているようだ。牛の鼻息を浴びながら奥に進むと、いかにも素人が取って付けたような扉があった。

扉を開けると、もっと生活感のある部屋になるのかと思いきや、あまり変わらず、ジジイがせっせと乾燥したトウモロコシを斧で割っていた。その隣には干し草に布を敷いただけの簡易ベッドがある。「おじいちゃん。ブラックパンサーをとっちめてやったでえ。もう二度と来ることはあらへん」

「なに……ほんとうか!？」

ジジイは手を休めてセロイナを見上げると目を丸くした。

「ほれ」

セロイナは腰布の間に挟んでいた赤い牙をジジイの前にちらつかせる。

「ほんとうに、二度とわしの庭に奴が現われることはないんじゃないかな?」

「うーん、とセロイナは腕を組んで、座っているジジイを見下ろす。

「あの庭は、おじいちゃんの庭じゃあらへんやろ?」

「どうということじゃ」

「柵もないし、大きな雑草が茂みをつくって、どう見ても昔からある庭には見えへん。最近、庭を大きく広げたんやろ?」

「……だからどうだと?」

「あの庭はずっと昔から、ブラックパンサーのものやっちゅうことや」

「……地主から土地の権利を買っておるし、違法なことは何もしておらんではないか。わしはな、奴に金を払ったのではない。土地に金を払ったんじゃ」

ジジイは立ち上がって、セロイナに詰め寄った。セロイナはジジイから目を離して、哀しそうに地面を見据えたままだった。

「分かったよ、おじいちゃん。ブラックパンサーは二度とおじいちゃんの庭にくることはない。もし庭に現われたら、報酬はぜーんぶ返す」

「ええっ!？」

と、喚いた私に、セロイナはなんとも穏やかな目をして微笑みかけた。

「そこまで言うんじやったら、このとおり報酬を払おう。じゃが、もし、また奴が現われたときには、お前達はペテン師じゃったと街中に言いふらすからな!」

「かまわんよ。マジセブ、行こうか」

セロイナはさっさと離れを出て行き、私は依頼主に一礼して、その場を去った。まあ、とりあえずはきちんと約束どおりの報酬をいただいたわけだ。

丘を下る途中、セロイナは夕陽にあの赤い牙を掲げた。世界の終わりかと思えるほどの赤い夕陽を浴びて、牙はよりいっそう燃えるように輝いている。

「庭を拓げたのは、娘のためだったのかな？」

妙に無口なセロイナに、なんとなく問いかけると、半分口を開けてセロイナが笑った。

「娘さんは美人やったなあ？ マジブー？」

「はあ？ どういうこと？」

「だから。扉を開けたところに、いたやろ？ フィオナさんが。モ
ーオって」

「……ええっ！？ フィオナって、牛のこと！？」

立ち止まる私に、満面の笑みを浮かべるセロイナ。

「あのかそジジイ……！」

杖を構えながら丘を登ろうとする私を引き止めて、セロイナは赤
い牙を親指で空に放った。

「千マルの十倍はいくやろ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6528y/>

セーブをお望みですか？

2011年11月20日03時14分発行